書籍紹介「狂食の時代」The　Great　Food　Gamble　ジョン・ハンフリース著

訳：永井喜久子　西尾ゆう子　　解説：筑紫哲也

「狂食の時代」The　Great　Food　Gamble は、日本で狂牛病が発生する前年の 2000 年 3 月に書かれた。著者はイギリスのジャーナリストの一人であり BBC ラジオのニュース報道番組「トゥデイ」のニュースキャスター、ジョン・ハンフリース John　Humphrys である。日本語翻訳本では、著者と同じくニュースキャスターでもあるジャーナリストの筑紫哲也氏が解説を書いている。

イギリスでは、80 年代の半ば以降 17 万頭もの牛が狂牛病に感染し、470 万頭が殺された。そして 1990 年代の初めには、BSE(いわゆる狂牛病)の恐怖の全貌が明らかになりつつあった。しかしイギリス政府が、ようやく人の進行性痴呆症新ヤコブ症は狂牛病からの可能性が高いと報告したのは、1996 年である。いわゆる第一次狂牛病パニックがおこった。そして本書の出版された 2000 年夏には、ついに欧州各国で狂牛病が発生し、第二次狂牛病パニックが起きたのである。そして 2001 年 9 月 10 日日本でも狂牛病の発生が報告された。

著者であるハンフリースは、「狂牛病は、始まりにすぎない」と言う。失われた大地のバランス、そして食品添加物、抗生物質漬けの養殖魚、細菌、遺伝子組み替え食品など、戦中戦後の食料不足から始まったイギリスの補助金漬け食糧政策による食の品質や安全性の瓦解の始まりだというのだ。

また著者は、貴重な農業遺産の破壊、みずみずしい草地、そして失われた小鳥のさえずりに対して社会はどんな価値をつければいいのか。政治家や業界が言うように本当に現在の食料は安いのかと問う。時には必要としない食物や生産しないことに対しても支払われる農業補助金は、すべて税金なのであると。また汚染された飲み水から化学物質を取り除く費用や、食品中の残留農薬が健康に及ぼす被害もコストとして考えなくてはいけない。その上に最後のコストとして食物そのものの品質と安全性が脅かされだした。BSE の財政的な負担は 50 億ポンド（約 9.2 兆円　2002.9/2）に近い驚異的なコストになったという。

イギリスでは、狂牛病に続いて、口蹄疫が農業危機を引き起こしている。そしてようやく国民は、第二次世界大戦以降これまでのイギリスの食糧政策に疑いの目を向けはじめたという。著者は、この 50 年の集約農業の過ちを二度と起こしてはいけない。未来を選ぶために、食品に何を求めるか、どのようにして作られたものを食べたいか。農業こそが国民の健康を左右するというところからスタートしなくてはいけないと強く主張する。

翻って、日本で第 1 号の狂牛病が報告されて 1 年が経過した。日本でも狂牛病が食のシステムの瓦解の始まりにすぎなかったことが次々あきらかになった。イギリスと同じく「もっと食べ物を」から始まった半世紀の食糧政策は、結果として食物そのものの品質と安全性を代償にした。日本でも、狂牛病を教訓に、食品に何を求めるか、どのようにして作られたものを食べたいかという消費者の声や農業が国民の健康を左右するというところから、食のシステムを再スタートして行かなければならない。しかし企業のエゴと業界の利権ばかりが目立ち、未だ道は見えないようだ。　　（山下満智子）